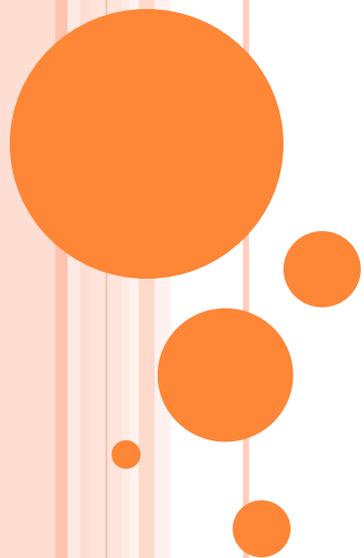


今、社会の最先端を行くらしい
フィードバック研究会ってなんだ



◆はじまり1◆

- いわゆる『支援』をする仕事に関わってきてぶち当たる疑問・・・支援者と被支援者の間に横たわる非対等性、不平等感みたいなもの
 - 「生きづらさ」の要因は個人の能力や資質の問題ではなく、社会との関係で生じるのに個人が対象化して一方的に支援される弊害
 - PS(パーソナルサポートモデル事業)に代表される個別支援が関係性の回復やエンパワメントを重視するならば、支援者による対象者への一方的な支援には限界がある
 - さらには、支援の場面ではいつも自分の価値観や人となり、生き方、考え方、感じ方が問われていく現実
 - 実際のアセスメント、プランニングなど支援のプロセスで十分に対話や協働ができていない。「聴くこと」と「伝えること」ができないため、支援者的な支援に陥ってしまう。
- 

◆はじまり2～さらには◆

- いわゆる「支援をされる側」は現実には豊かな感性と自分の言葉を持っているにもかかわらず、社会的排除による機会の逸失と学習の不足、社会的にもつたいない現実。
- 同時に「支援する側」に内在化する「支援者としての立場」「社会的正義」などの固定化、管理化された概念や価値観により言葉や発想が抑圧されている、これまた社会的にもつたいない現実。

今の支援現場は「支援する」「支援される」や「社会的排除」「弱者」「専門家」などといった立場によって無意識に生じる『もつたいない現象』だらけ これじゃ、支援の効果は？？？

支援で出会う人たちが立場や役割を越えて自分と他者を理解し合い、交渉し合う機会が「練習」として、「試み」として必要ではないか？



◆概要◆

- 2011年の秋に始まり、現在月2回のペースで活動
- 参加者は今の社会に生きづらさや疑問を感じ、自分なりに考えている人（支援を受けている人が多い 別に深く考えていなくて、単に面白そうだから来ている人の方が多いかも）
- はじめのころは3、4人で活動していたが、最近10人ほどに拡大、発展中である（紆余曲折、試行錯誤で数カ月たったかな）
- 活動内容は2時間ほどのおしゃべり
- 研究会といっても特に毎回決まったテーマがあるわけではなく、その回ごとに参加者から出た聞きたいこと、話したことから自然発展していく雰囲気
- 研究といっても何かの答え、正解のようなものを求めていくのではなく、それぞれの感じ方を伝え合うことに重点をおいている。

◆定義◆

- 一見するとただのおしゃべりのようでもあるが、ただのおしゃべりではない
- 今の抑圧させた社会の中で、何が生きづらさのもとで、どうしたらもっと楽しく自由に生きられるのかをみんな楽しく模索するおしゃべりである
- つまり生きづらさは一人で考えてもなかなか解決しなくて、ほかの人の感じたことをきいたり、自分の話したことに「それについて私はこう感じた」というもの＝フィードバックをもらうことで発展していくもので、そのための場がこのフィードバック研究会なのだと思う
- それぞれの感じることは聞いているだけで楽しいし、気づくことも多いし、自分のことがわかっていくのも楽しいからみんなきているのでしょ、たぶん

◆参加者心得◆

- 自分が感じたことを伝える(主語のない言葉、安易な一般論はつまらない、意味がない)
- わからないのに、わかったふりをしない(わからないことこそ、研究を深める)
- 使用する言葉のもつ意味や定義を問わずして、何となく会話をしない(同じ言葉をつかっているけど通じない現象を回避)
- 感じたことは個人的な感情や価値観と切り離して、率直に口にしてみる(よしあしを決めつける発信は研究を阻害する)
- 疑問や質問を大切にすること(ふとした疑問が研究を深める)
- 人はみんな違うんだ！という前提で話をする
- 日常の力関係や役割などを持ちこまない

(これって、常識がまだない「こども」に戻るってことかも?!)

